

初級日本語学習者の終助詞習得に関する一考察 —「ね」を中心として—

初鹿野阿れ

要 旨

本調査は、お茶の水女子大学において行われている縦断的^(註1)第2言語習得研究プロジェクト(LARPI)の一部として、4人の初級日本語学習者の発話資料を終助詞の習得過程という観点で分析したものである。^(註1)

その結果、1年間にわたって収集した資料に観察された終助詞はほとんどが「ね」と「か」であり、その使用数は、4人のうち3人の学習者が資料中15回前後と非常に少ない結果となった。もう1人は他の3人と異なり、終助詞が早い段階から多用され誤用を繰り返しながら習得していく過程が観察された。また、学習の初期の段階では「そうですね」、「そうですか」などの定型表現の中での使用が多く見られるが、「そうですか」の誤用がほとんどなかったのに対し、「そうですね」にはかなりの誤用があり、同じ定型表現であっても習得のしやすさに違いが見られた。

機能別に「ね」の習得を分析してみると、当初予想された確認や同意を求める「ね」や同意を表わす「ね」が特に多く使われているわけではなく、機能的に特殊と考えられる「ね」が多く観察されるという興味深い結果となった。

[キーワード] 終助詞、習得過程、定型表現、「ね」

1. はじめに

日本語の会話において終助詞の果たす役割は大きく、上野(1972)、大曾(1986)でも指摘されているように、日本語学習者にとってその適切な使用は、自然なコミュニケーションを行う上で欠くことのできないものである。

終助詞そのものの機能についての研究は近年盛んに行われており、特に「ね」と「よ」に関しては、主に対話者への配慮、情報の共有といった観点から分析が進められている。^(註2)しかし、第2言語としての日本語の習得研究における助詞の研究は、その多くが格助詞と係助詞についてのものであり、終助

詞の習得を中心に行われた研究としては、「ね」について述べられている Sawyer の縦断的研究(1992)、木村(1993)などが見られるのみである。

2人の研究を簡単にまとめると、まず Sawyer(1992)は、次の3つの仮説に基づいて、学習者の「ね」の使用を分析している。資料は、日本人とのインタビューに現われた11人の初級日本語学習者の発話で、インタビューの回数は学習開始後2ヵ月、5ヵ月、8ヵ月、14ヵ月の4回である。

- 1) 「ね」は一般的な語彙や他の文法的助詞(格助詞、係助詞など)の発達と比べてゆっくりと発達する。
- 2) 「ね」の使用は、初め、言葉のかたまり(chunk)として学習された定型的な表現(「そうですね」及び「そうね」)の中で現われ、徐々に、より生産的なコンテキスト(productive context)の中で使われるようになる。
- 3) 学習者間で個人差が大きい。

結果は、仮説1)～3)をすべて支持するものとなった。Sawyerは、方法論、学習者数など多くの問題点は認めながらも、「ね」の習得について、いくつかの重要な現象を実際の発話資料を基に明らかにできたと述べている。

次に木村(1993)では、英語でかかれた短い会話を中級前期の日本語学習者が日本語に訳したものを資料として、「ね」の正用と脱落の傾向について考察している。その結果、話し手に同意を求める時、また同意を求められた時の答えに使用される「ね」が習得しやすく、特に「そうですね」は言葉のかたまり(chunk)として考えられている可能性があると述べている。

本調査では、Sawyer(1992)、木村(1993)の結果、及び筆者の日本語教育経験に基づいて、分析に当たり以下のような点に注目した。

- 1) 学習の初期の段階において、終助詞は「そうですね」「そうですか」のような定型的な表現において出現する。
- 2) 「ね」は「よ」や「な」などの他の終助詞に比べて習得が早い。
- 3) 同意を求める/同意を表わす、または相手の情報を確認するといった機能の「ね」(下記分類の(1)(2-A、B))は他の機能の「ね」より早く習得される。

本稿の目的は、1年にわたり収集した4人の日本語学習者の発話資料に現われた終助詞の使用傾向を、特に「ね」に焦点を当てて調査、分析することで、その習得過程を明らかにすることである。ただし、他の終助詞と異なり習得が

困難ではないと思われる疑問を表わす「か」については調査の対象からはずした。また、語末、文節末に現われる間投助詞（「あのね、きょうはね」のような「ね」）は、機能の面でも習得という点でも、終助詞と関連があると考えられる^(注3)ため、分析対象に含めた。

分析に際して学習者の機能別の習得傾向を見るために大曾(1986)、陳(1987)、益岡(1991)、伊豆原(1993)を参考にして以下のように「ね」の機能を分類した。^(注4)

- (1) 基本的に双方が情報を共有していると話者は判断しているが、その判断の正しさを相手に確かめる用法。判断の正しさの決定権は聞き手にある。この場合聞き手は「そうですね」のような応答が許されない。

例1 > A: (飛行機は) 成田からパリまでですね。

B: ええ、そうです。

- (2) 目前の事、客観的事実に話し手と聞き手が同じ情報、判断を共有していることをお互いに確かめ合う用法。同意を求め、持ちかける側(2-A)と、同意を表わす側(2-B)に分けられる。

例2 > A: あの大学はいい大学ですね(え)。

B: ああ、そうですね。

- (3) 聞き手の領域に属するものについてのコメントを表わす用法。「ね」を付けることによって自分の判断の押し付けという印象が軽減し、相手に配慮している印象を与える。(例3) この用法には相手の気持ちを推測して表わすことによって話し手の聞き手に対する共感を表わすものも含まれる。(例4)

例3 > A: (Bのネックレスを見て) かわいいですね(え)。

B: そう?

例4 > A: 土曜日は仕事をしました。

B: たいへんですね(え)。

- (4) 話し手の経験や意見など、基本的に聞き手と情報、判断を共有していないと思われる内容を説明する際に、聞き手を話題に引き込み、共感を得ようとする用法。

例5 > でも一、本当に、数学者ですから、(統計を) 教えるのはすこし一だめですね。

伊豆原(1993)は、この用法を、終助詞がなくても不自然ではなく、「よ」で置き換えることもできるが、「ね」を使用することで聞き手との気持ちの一体化、共有化を求めようとする話者の働きかけを表わしていると述べている。

この用法には、話者自身についての判断や感情を表わす時に「ね」をつけて、あいての共感や同情を求めるようなものもある。

例6 > (自分のことを) ほかですねえ。

2. 調査方法

対象学習者はニュージーランド人女性(学習者A)、同男性(学習者B)、アメリカ人女性(学習者C)、デンマーク人男性(学習者D)の4人で、1992年7月末に来日し、8月から日本語学習を開始した。それまでの日本語学習歴はまったくないが、学習者Dはそれ以前に来日経験がある。調査資料は1992年11月(学習開始後第13週目)から1993年10月までの1年間に行われた、教師と学習者の一対一の発話資料である。^(注5)

分析は、録音資料を基にそれを文字化し、そこに現われた終助詞(間投助詞)を対象とした。終助詞の使用が適切かどうかの判断は、学習者のイントネーションも考慮しながら、母語話者が会話の流れの中で聞いて許容できるものを正用とした。その場合、終助詞の前に現われた表現の語彙的、文法的誤り、文体の選択の誤り^(注6)は正しく発話されたものとして判断した。^(注7)

3. 結果

3-1. 全体の傾向

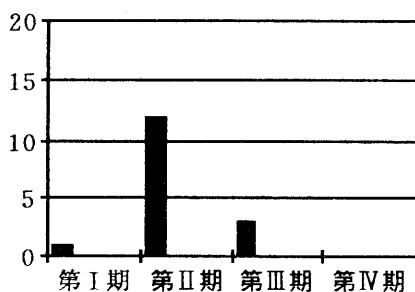
各学習者の資料に現われた終助詞の数を、正誤を問わず、3ヵ月ごと、I期～IV期に分けてグラフにしたものがグラフ1～4である。

このグラフを見ると、学習者A、B、Cの終助詞の使用数は非常に少なく、Aの第II期を除いて、各期すべてが10例以下である。これは日本人の会話における文末の約35%が終助詞である(メイナード1993)こと、資料の総時間数が各学習者とも2時間前後(学習者Cのみ約1時間半)であることを考えると、3人の終助詞の習得があまり進んでいないことがわかる。それに対し、学習者Dは第I期から終助詞を多く使用しており数の上からは習得が早いと言える。

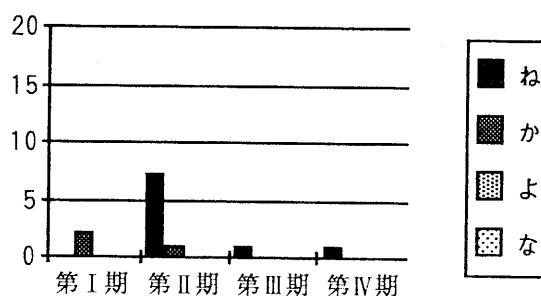
正用率という面を見ると、学習者A、B、Cは使用数が少ないため、4期を通じての全体的な傾向は見られないが、学習者Dは第Ⅰ期に66.0%、第Ⅱ期に84.9%、第Ⅲ期に87.7%、第Ⅳ期に91.9%と着実に高くなっている。この点からも学習者Dの習得が他の3人に比べて進んでいると考えられる。

終助詞使用回数

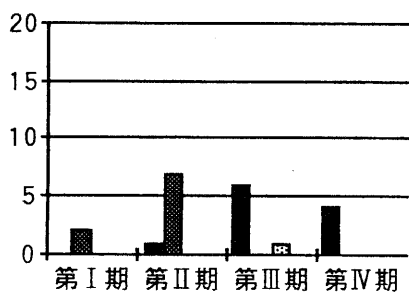
[グラフ1] 学習者A



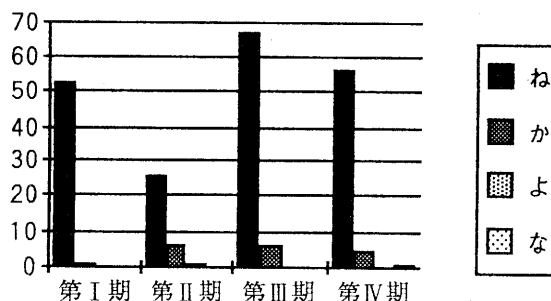
[グラフ2] 学習者B



[グラフ3] 学習者C



[グラフ4] 学習者D



次に、4人によって使用された終助詞の種類を見てみると、全体の88%が「ね」で、ついで「か」が11%、他に「よ」が2例、「な」が1例観察された。これは、第35週目（第Ⅱ期）で導入された「わ」以外、授業で導入した終助詞がすべて現われたことになるが、日本人の発話中の「ね」と「よ」の出現の割合がおおよそ3：1である（メイナード1993）ことを考えると、「よ」の習得が「ね」よりもかなり遅いことがわかる。特に学習者Aは調査資料中、「ね」しか使用しておらず、他の終助詞が全く現われなかった。また、学習者BとCは第Ⅰ期、第Ⅱ期において「そうですか」、「そうか」という定型的表現の中で「か」が出現したが、第Ⅱ期以降はほとんどが「ね」となっている。

その中でも、特に学習者Bは1例を除いてすべてが「そうですね」のかたちで現われている。学習者Dは使用数と共にバリエーションも一番多く、4種類の終助詞が観察されたが、やはり「よ」の使用が「ね」に比べてきわめて少なかった。「か」の使用は、学習者B、Cと同様、すべて「そう」と共に用いられる定型表現で、第Ⅲ期の1例を除いてすべて正用であった。その他、授業で導入していない「な」を使用しているが、これは男性語としての「な」であり、学習者Dの教室以外でのインプットによるものであると考えられる。^(注8)

3-2. 「ね」の使用傾向

次に、一番使用数の多かった「ね」の使用傾向を学習者別に検討する。

3-2-1. 「ね」の正用率

まず、「ね」の正用率であるが、3-1で述べたように学習者A、B、Cは使用数が少ないため、その正用率を詳細に検討することにあまり意味はないであろう。しかし、大まかな傾向としては学習者Bの正用率の低さが際立っている。(4期を通じて全体の約3分の2が誤用である。)その原因は学習者Bが、例7のように相手の質問や確認に対して「そうですね」と「ね」を付加して応答しているため、これは全誤用6例中5例を占めていた。全体の誤用数が多くないので正用率は高いが、学習者AとCも誤りの傾向は類似しており、学習者Aは誤用4例全部、学習者Cは誤用2例中1例が、例7のような「そうですね」の誤用であった。

例7> 日本語母語話者： 3時間は全部1年生ですか。

学習者B : うん、そうですね。

学習者Dの正用率は、表1の通りである。3-1で見たとおり、学習者Dの「ね」の使用数は、他の3人と比べて第Ⅰ期から非常に多いが、正当率が約65%であることを考えると、「ね」の使い方を完全に理解して使用しているとは言えない。つまり、学習者Dは学習の初期の段階から文末に「ね」を付けるというストラテジーとでもいうようなものを使用しており、「ね」の濫用傾向が見られるが、期を追うにつれて正しい用法を身に付け、一年でかなり習得が進んだと考えられる。第Ⅰ期に正用率が低かった理由は、他の3人の学習者と同様、第Ⅰ期において対話者の質問や確認などの返答として「そうですね」を使用してしまう誤用が18例中6例、「そうですか」と納得を表わすべきところ

に「ね」を使用してしまう誤用が1例など、「そうですね」の誤用が全部で8例と顕著であったことがあげられる。また、「どこへ行きましたか」などの疑問詞を含む疑問文に対して、「～へ行きましたね」と「ね」を付加してしまう誤用3例も見られた。第Ⅱ期以降、正当率が上がっているのはこれらの傾向が徐々に改善されているためである。

[表1] 学習者Dの「ね」の正用率

| | 第Ⅰ期 | 第Ⅱ期 | 第Ⅲ期 | 第Ⅳ期 |
|-----|--------|--------|--------|--------|
| 正用率 | 65.38% | 80.77% | 88.06% | 91.07% |

3-2-2. 「ね」の機能別正用傾向

次に機能別に4人の正用傾向を見る。1で示した(1)から(4)の分類に間投助詞的な用法(5)を含め、各学習者の「ね」の正用を機能別に表わしたものがグラフ5から8である。

このグラフで見ると、学習者Aは相手の発話に同意を表わす「そうですね」のような「ね」が4例、「大変ですね」「残念ですね」といった対話者の気持ちを推察して共感を表す用法(3)が4例など、対話者の意見や感情に自分を近づけていく、いわば同調的とも言える「ね」の使用が比較的多い。また、学習者Bも、前述の通り正用数は少ないのだが、「そうですね」が3例と、同意を示す表現での正用がほとんどである。学習者Cは、自分で切り出した話に対する自分自身のコメントに「ね」を付けて相手の共感を得ようとする表現(4)の正用が、他の2人と比べて目立ち、また、「あのね」のような間投助詞的な用法が第Ⅲ期に使用されていることが特徴的である。

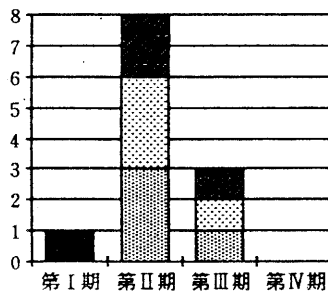
3人の「ね」の正用は数が少ないので特に共通した傾向があるとは言えないが、「そうですね」以外で「ね」が付加された言葉がほとんど形容詞、形容動詞の一語、またはそれに「です」が付加されたもの、及び動詞のマス形1語であるという点は共通して見られた。

学習者Dは(4)の自分の状況、経験を述べるときに相手を話に引き込み、共感を得ようとする「ね」の使用が多く見られ、第Ⅰ期には全正用数の4割、第Ⅲ期、第Ⅳ期においては全体の6割～7割ほどを占めている。これは、この種の用法が、情報の共有を前提とする「ね」の機能の中で特殊なものと考えられ

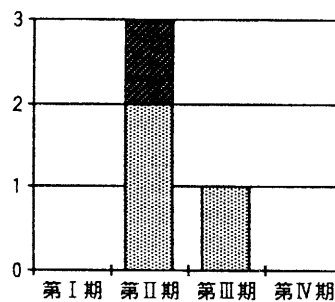
がちであることを考えると、興味深い結果と言える。また、学習者Dは、聞き手の領域に属するものについてのコメント(3)の使用がほとんど見られず、これは大曾(1986)で、この種の用法は学習者にはなかなか使いこなせないと述べられていることと一致している。また、その他の特徴として第Ⅲ期以降に現われた「今日はね、～」や「でもね、～」のような間投助詞の使用があげられる。この用法は授業では全く取り上げられていないが、教師の発話や日常接している日本人からのインプットが学習者の発話に取り込まれたものであろう。学習者Cも第Ⅲ期において「あのねえ」という形で間投助詞を使用しており、自分自身のコメントに「ね」を付ける(4)の使用と、間投詞的用法(5)が特徴的であるという意味では学習者CとDには共通性があると言えよう。

「ね」の機能別正用数

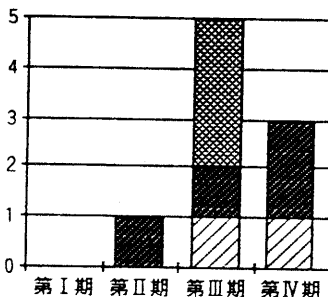
[グラフ5] 学習者A



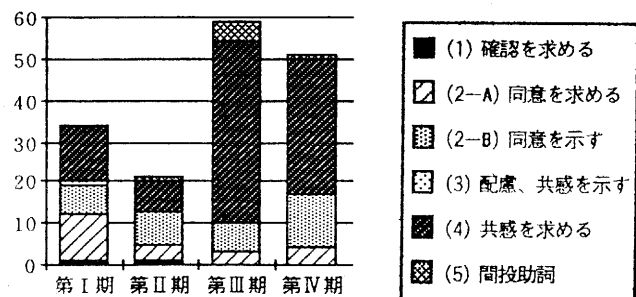
[グラフ6] 学習者B



[グラフ7] 学習者C



[グラフ8] 学習者D



4. まとめと考察

以上の分析結果をまとめ、学習初期における終助詞、特に「ね」の習得過程

について考察を試みる。

まず、終助詞全体の習得の傾向については、調査前の予想通り「ね」が一番習得しやすく、「よ」や「わ」など他の助詞の習得が自発的な発話に現われるまでに進むのは非常に難しいという結果になった。「か」は、学習者の発話における使用数が「ね」ほど多くはなかったが、使用された例は1例を除きすべて正用であり、機能的には習得しやすいと考えられる。しかし、これは定型表現である「そうですか」に限ったことで、「～ですか」といったSawyer (1992)の言うところの生産的コンテキスト (productive context) において「か」が自発的に使用されるようになるには時間がかかると考えられる。

また学習初期において終助詞は、「そうですか」、「そうですね」のような定型的表現の中で現われる場合が多く、これもやはり予想通りの結果であった。しかし、「そうですね」の使用には誤用が多く、「ね」を付けてはいけない箇所での不適切な使用が見られた。これは同じ定型表現であっても、「そうですか」に比べて「そうですね」のほうが習得が難しいということを示している。また、学習者Dは学習初期の段階で、定型表現を多く使用しているが、生産的なコンテキストにおいても「ね」を多く使用しており、ある程度の個人差も見られることがわかった。

次に「ね」の習得過程をまとめる。まず学習者別の習得傾向を見ると、学習者A、B、Cのように、「ね」が導入されてもそれが自発的な発話に出現するまでには時間がかかり、1年間の観察期間中その使用数、正用数ともにほとんど増えないグループと、学習者Dのように学習初期の段階から「ね」を濫用し、誤用を重ねながら、徐々に習得していくタイプに分かれた。Sawyer (1992)では11人の学習者の「ね」の習得に3つのタイプが観察されたことが述べられている。1つは、「ね」が定型表現においては1度も使われず、すべて生産的なコンテキストの中で使用されているグループ (1人)。このグループの学習者は文末以外の「ね」(間投詞的用法の「ね」)を多く使用している。2つ目は3つ以上の異なった言語環境^(註9)で「ね」を使用しているグループ (3人)、そして3つ目は3つ以下の言語環境で、使用数も5以下と非常に少ないグループである。これは本調査の結果とも共通する点があり、終助詞の習得のタイプとしてこのようないくつかの型があるのではないかと示唆される。これは今後、他の学習者にも調査を行い検証すべき点であると考えられる。

次に習得しやすい「ね」の機能について考察を試みる。1で述べたとおり、確認または同意を求める「ね」は学習者にとって習得がやさしいと考えられ（大曾1986）、また、「そうですね」のような話の受け手として対話者に同意を表わす「ね」は、定型的な表現として習得しやすいと予測された。（Sawyer1992、木村1993）しかし、3-2-1、3-2-2で述べた通り、「ね」の習得があまり進んでいないと考えられる学習者A、B、Cの「ね」の正用には一定の傾向は見られず、また「そうですね。」には誤用も多く見られることから、習得の遅い学習者にとって、当初予想されたような確認、同意を求める「ね」（1、及び2-A）や同意を示す「ね」（2-B）だけが特に他の機能の「ね」と比べて習得されやすいとは言えないようである。学習者Dに関して、第I期、II期における同意を求める、及び同意を表わす「ね」の正用は比較的多いと言えるのであるが、それが他の用法（4）に比べて特に高いわけではなく、また確認を求める用法の使用は非常に少ない結果となっている。

「ね」正用の中で興味深いのは、学習者A、C、Dが、「ね」の機能としては特殊な（4）のような用法をかなり早くから、2期以上の期間にわたり使用していることである。特に学習者Dはその正用数が第III、IV期における「ね」の総正用数の6~7割を占める結果となっている。学習者Dには初期の段階からいわば手当たりしだいに「ね」を付ける傾向があったことを考えると、濫用タイプの学習者は、学習初期の段階では相手と共有していない情報にも「ね」を付けて不自然な発話を繰り返してしまう反面、（4）のような用法がかえって習得しやすいと言えるのかもしれない。しかし、この考察に関して推測の域を出るものではなく、今後「ね」の機能分類の再考を含め、より多くの学習者の「ね」の習得研究、及びその結果との比較が必要であると考えられる。

5. おわりに

以上、4人の学習者の1年にわたる発話資料を基に、初級日本語学習者の終助詞、特に「ね」の習得について調査した結果をまとめ、いくつかの考察を試みた。終助詞の抽出を目的とするテスト形式の資料を収集しなかったこと、また学習者数の少なさ、学習者A、B、Cの資料に現われた「ね」の使用数の少なさなどを考慮すると、この結果が学習者の終助詞習得の実態をすべて表わしているとは言えないし、これらの結果を過剰に一般化することは危険である。

しかし、Sawyer (1992)が述べているように、「ね」のような第2言語の語用に関わる能力の発達については、その重要性にもかかわらず研究があまり進んでいるとは言えない。また、方法論も十分に確率していない分野である。その中で、本調査はひとつのケーススタディーとして、初級日本語学習者の「ね」の習得について幾つかの示唆を含んだ結果が得られたと思う。

<注>

- 1) 本稿は平成5年度日本語教育学会春季大会で中間発表を行った「縦断的第2言語習得研究：初級日本語学習者の中間言語」（発表者：長友和彦、法貴則子、初鹿野阿れ、共同研究者：登里民子、井内麻矢子、高橋紀子、広利正代）の終助詞習得研究の部分に、新しく資料を付け加え、分析方法を検討し直してまとめたものである。
- 2) 上野(1972)、大曾(1986)、陳(1987)、神尾(1989)、佐治(1991)、益岡(1991)、メイナード(1993)、伊豆原(1993)など。
- 3) 佐治(1991)では終助詞と間投助詞の区別の根拠は必ずしも満足のいくものではないと述べ、双方を一括して論じている。
- 4) 例文は基本的に学習者が使用したもの。分かりにくい場合は手直しをした。文字化に使用した記号は以下の通り。
、 : 1秒以下のポーズ
? : 上昇イントネーション
- 5) 回数は各学習者とも10回～12回で、一回の資料は10分前後。対話の内容は学習者が書いた日記を題材に日本人がインタビューをするという形式をとっているが、話題は自由に移行しており、インタビューというよりは雑談の性質の強いものである。詳しいデータは平成5年度お茶の水女子大学人文科学研究科日本語文化専攻修士論文『初級日本語学習者を対象としたコミュニケーション・ストラテジーの縦断的研究』（初鹿野阿れ）を参照のこと。ただし、新しいデータ（学習者A、B、Cの発話資料、各10分前後）が追加されている。
- 6) 全体が「ます」で話されているのに、突然「そうか」のような文体の統一されていない表現が現われ、不自然さを感じるような場合。
- 7) 調査期間における授業での終助詞の導入は、理解を表わす「そうですか」

の「か」と、確認／同意を求める、または同意を表わす「ね」が学習開始後第1週目に、感情的な強意を表現するものとして「よく降りますねえ」のような「ねえ」が第10週目に、「よ」は話者の確信を強調するものとして第11週目に行われている。(いずれも資料収集開始前)また第35週目に女性が使用する終助詞として「わ」が紹介されている。

- 8) 学習者Dは子供が日本の幼稚園に通っており、子供や子供の見るテレビの影響と思われる語彙がいくつか観察されている。
- 9) 言語環境とは、「ね」の前に現われることばの種類である。例えば、名詞に付加されているのか、動詞に付加されているのかなど。

〈参考文献〉

- (1) 伊豆原英子(1993) 「「ね」と「よ」再考－「ね」と「よ」のコミュニケーション機能の考察から－」『日本語教育』80号、p.103-114
- (2) 上野田鶴子(1972) 「終助詞とその周辺」『日本語教育』17号、p.62-77
- (3) 大曾美恵子(1986) 「誤用分析I『今日はいい天気ですね。』－『はい、そうです。』」『日本語学』5-9、p.91-94
- (4) 神尾昭雄(1989) 「情報のなわ張りの理論と日本語の特徴」『日本語文法小辞典』p.223-244 大修館
- (5) 木村静子(1993) 「日本語学習者の「ね」の習得に関する一考察」Working Papers Vol.4 国際大学
- (6) 佐治圭三(1991) 『日本語の文法の研究』
- (7) Sawyer, Mark(1992) The Development of Pragmatics in Japanese as a Second Language : The Sentence-Final Particle NE. in Gabriele Kasper (ed.), *Pragmatics of Japanese as Native and Target Language*. Univ. of Hawaii; Second Language Teaching & Curriculum Center. pp.85-113
- (8) 陳常好(1987) 「終助詞－話し手と聞き手の確認のギャップをうめるための文接辞－」『日本語学』6-10、pp.93-109
- (9) 益岡隆志(1991) 『モダリティーの文法』くろしお出版
- (10) 水谷修／水谷信子(1988) 『外国人の疑問に答える日本語ノート1』ジャパントイムズ
- (11) メイナード、K・泉子(1993) 『会話分析』くろしお出版

(お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻1年)